

少少许胜多多许

北基行 記

中国 浙江省紹興市 東湖 入口付近

ちよびりは どっさりに勝る

“文章は沉着痛快を以て最となす。左、史、庄、騷、杜詩、韓文は是なり。間（たま）に一二尽くさざる言、言外の意あり、少少许を以て多多许より勝る者は、是れ他（か）の一枝一節の好处にして、六君子の本色に非ず。”

これは清代乾隆年間の鄭板橋が、山東省の濰県で官吏をしていた頃、弟にしたためた手紙文の一節である。この主旨は、文章は痛快に書き、道理はきっぱりと吐き、煮え切らない言葉や、言外の意を以て文章の隙間を塞ぐことに賛成しない、と述べたものである。鄭板橋は各界の人士に、転倒表現や煮え切らぬ文章に、不快感を表しており、絵一枚描くにしても一点の贅墨さえも許さなかった。彼は己が絵にたいして、ちよびりはどっさりに勝ると度々表明している。少ない墨でいかに主題の神韻を引き出すかを旨とした。

現在の一般状況から申して、ちよびりは どっさりに勝る、この言葉は更に価値があるように思う。この点について、鄭板橋が言っていることは、左丘明、司馬遷、莊周、屈原、杜甫、韓愈等の本色、即ち作品全体を云うのではなく、それらの一枝一節の優点を述べているのである。現在我々が読み書きする超長文を、古代作家は誰一人見ている

ない。故に、古人にとっては、一枝一節であっても、今日の我々においては一大事である。

文章を書く時は、その主旨を明確に書くべきで、あやふやな表現は避けねばならない。多くの文字を使わずとも、明確に表現できる。宋代の曾南豊は、蘇老泉の策論に高い評価を下し、その使用文字についてつぎのように述べている。

“老泉の文、侈（し）能く之を約しめ、遠能く之を近づけしめ、大能く之をして小ならしめ、微能く之をして著せしめ、煩能く亂れず、肆能く流れず。高祖等の論を作り、其の雄壯俊偉は、若も江河 決し而して下るなり。其の輝光の明白なること、星辰を引きて而して出ずる若くなり。”

史論が、このように痛快透徹で、内容が充実しておれば、しょうしょう長くても読むであろう。しかし、蘇氏父子の『三蘇策論』を読んだ

人なら誰でも知っているだろうが、その史論はたいして長くない。蘇東坡がたまに自慢するように、「吾文は萬斛（こく）の珠の如く、之を取りて竭（つき）ず。惟だ當（まさ）に行くべき所に於いて行き、止るを得ざる所に於いて止まるのみ。”よく行く、よく止まる、しかも止まるべきところに止まるのが、作者に求められる、「実事求是」、つまり現実に真理を追究する、この精神である。

最近の文章に、省略されるべき文字が省略されていない、このようなのがしばしば目につく。それは作者に実事求是の精神がかけており、同時に読者にも接する態度に厳肅性が欠如しているからである。魯迅が『北斗』にあてた手紙で、しつこく主張していることは、作品を仕上げると、繰り返し読み、あってもなくてもよい文字は削ること。残念ながら、この意見は、多くの作者に受け入れられていない。自分の文章に

人の手を入れさせない。この点の改善には、まだ多くの困難が付きまとう。新聞雑誌の編集部には思い切って原稿の添削をやってもらいたい。それに、古今の大著作者の文章添削例を収集し、広く読者を教育もしていただきたい。添削者は、曾南豊を学び、添削を受ける側は、陳後山を学ぶことだ。

明代の陳繼儒の『讀書鏡』はこのように述べている。

“陳後山 作を攜帶して南豊に謁し、一見して之を愛し、因て款語を留む。適（たま）たま一つ文字を作らんと欲するあり、因りて後山に托し之を為さしむ。後山 日を窮め力めて、方（はじめ）て成る。僅に數百言なり。明日以て南豊に呈す。南豊云う、大略は好からん、只だ是れ冗字多し。略し刪動すること可ならずや否やを知らず？ 後山因りて改穿竄せんことを請う。南豊 座に就き筆を取るや、抹する處 一兩行に連なる、便ち以て後山に授く。凡て一二百字を削去す。後山之を讀み、則ち其の意猶お完なり。因りて嘆服し、遂に以て法と為す。”どうですか、この二人の態度はたいしたものだ。現在の作家の中に、この様な態度をとれる人が何人いるかだ。

この態度をとれるかどうかは、人間ができているか否かの問題である。普通の作家は、己が文章に人の手を入れさせない。一つの問題をくどくどと述べないと、すべてを言い切れないと思っている。己の概括表現能力を磨こうとする努力がたりない。どんな問題、討論においても、くどくど述べるよりも概括的にのべたほうが、よほど説得力がある。清の文人、彭績は鄭板橋と同時代の人であるが、彼が概括力のある一篇を残している。彼の書になる、『亡妻龔氏墓志銘』である。それは、“嫁ぎて十年、年三十、疾を以て卒す。諸姑兄弟之を哭き、鄰人を感動せしむ！是に於いて、彭績 柴米の價を知り得る。門戸を持して、專精讀書すること能はず。期年、髮 數莖白し”。どうだ、これが真の「少少许、多多許に勝る」というものだ。

この文章には、空虚な内容はなく、充実した内容、豊富な情実に、圧倒され、心を打たれる。これより推論すれば、どんな文章でも、文字の精練に努めると、自ずとそこに、生き生きと生気がみなぎるのではないか。

【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

『少少许多多許』ひとそえ

第十章は鄧拓先生による「文章読本」です。

文章は「痛快」に書くべし、と冒頭から記します。

文章は必ず意味を「清楚」にするべきと明解に書いています。

魯迅の言を引き、反復確認して「可有可無」を削れと言います。

日本語と共通の漢字なので混同しますが「痛快（tong・kuai）」は、きっぱりとした言葉を使うという意味で、「清楚（qing・chu）」は、はっきりと書くというニュアンスになりそうです。そして「可有可無」は、有っても無くてもよいような文言という意味になるところでしょう。はっきり、きっぱり、すっきり書きなさいとのご教示のようです。

1980年代の山東省に住んでいた頃に、人物についても「痛快」や「直率（帥）」を「きっぱりしたとても良い品性」への褒め言葉として馴染んでいました。また「帅哥（shuai・ge）」というのは、あか抜けた粋な男、格好良い兄さんというニュアンスと受け止めました。2010年頃の上海では「酷（ku）」が最も多用される褒め言葉でした。まさに英語の cool 由来の外來語です。鄧拓先生の頃には存在していない言葉ですが、2011年版の「現代漢語詞典」には①暴虐とあり、②英語音訳。形容人外表英俊瀟灑。形容事物時尚、新潮、独特と並記されています。対内開放のない対外開放の時代の外見重視の言葉なので、文章を褒める時に「酷」は見かけません。

ところで、鄧拓先生もかなりの「帅哥」であります、ご自身の文章が「痛快」「清楚」かについては、毎月の講談会課題で「可有可無」に苦しみながら試訳をしている立場からは若干の異論があります。

井上邦久

少少许胜多多许 原文

“文章以沉着痛快为最，左、史、庄、騷、杜詩、韓文是也。間有一二不尽之言、言外之意，以少少许胜多多许者，是他一枝一節好处，非六君子本色。”

这是清代乾隆年間鄭板橋在山东濰县作官的时候，寄给他弟弟信中的一段话。

此信主旨是提倡写文章要痛快，道理要讲透彻，不赞成以不尽之言、言外之意来掩盖文章的空虚。但是，郑板桥处处表示他最讨厌那些颠倒拖沓的文章，连画画也不愿意浪费一点笔墨。他常说自己的画也是以少少许胜多多许，着墨无多而形神兼备。

就我们现在的情形而论，提倡以少少许胜多多许，似乎更加必要。虽然，郑板桥说这一点并非左丘明、司马迁、庄周、屈原、杜甫、韩愈等人的本色，而只是他们的一枝一節好处；但是，这些古代的作家，又有谁见过或做过我们现在看惯了的长文章呢？因此，对古人说来不过是枝节的小事，对我们说来却变成一宗大事了。

当然，写文章一定要把意思说清楚，不要吞吞吐吐。而要说的清楚，却未必要用很多文字。宋代的曾南豊，对于苏老泉的策论文字有很好的评价，他说：“老泉之文，侈能使之约，远能使之近，大能使之小，微能使之著，烦能不乱，肆能不流。作高祖等论，其雄壮俊伟，若决江河而下也；其辉光明白，若引星辰而出也。”如此痛快透徹的史論，内容充实，即便写得再长些，人们也是爱看的。然而，然而，只要读过苏氏父子的《三苏策论》的人都知道，他们的史論往往都不长。正如苏东坡偶尔自夸的：“吾文如万斛之珠，取之不竭，惟行于所当行，止于所不得不止耳。”能行能止，而且行止适当，这就要求作者具有实事求是的精神。

我们每日都可以看到有不少文字是可以省略而没有省略的，其原因就在于作者缺乏实事求是的精神，同时也是对读者缺乏严肃负责的态度。魯迅给《北斗》杂志的信，曾一再坚决主张，作者对自己的文章，必须反复看几遍，删去可有可无的字句。可惜至今还有许多作者不肯接受魯迅的意见，对自己的文章死都不愿删改。看来这一方面今后还需要进行艰苦的工作。报纸刊物的编辑部特别要大胆认真地帮助作者删改稿件，要收集古今大著作家删改文章的典型事例，来教育广大的读者和作者。最好要让删改者学习曾南豊，被删改者学习陈后山。

据明代陈繼儒的《讀書鏡》載：“陈后山携所作謁南豊，一见爱之，因留款語。适欲作一文字，因托后山为之。后山穷日力，方成，仅數百言。明日以呈南豊。南豊云 大略也好，只是冗字多，不知可略刪動否？后山因請改竄。南豊就座取筆，抹处连一兩行，便以授后山。凡削去一二百字，后山讀之，則其意尤完。因叹服，遂以为法。”你看他们的态度多好！我們现在的作者，抱這般态度的能有几人？

很明显，态度如何是受思想水平决定的。有许多作者不许别人删改文章，因为他觉得，只有反来复去阐述一个问题，才能把意思说透，而不肯努力提高自己的概括能力。其实不论对任何问题，概括的说明总要比详细的说明有力得多。与郑板桥同时的一位清代文人彭績，写过一篇概括力最强的非常动人的文字，这就是他作的《亡妻龔氏墓志銘》。它写龔氏“嫁十年，年三十，以疾卒。诸姑兄弟哭之，感动邻人！于是彭績得知柴米价；持门户，不能专精读书；期年，发数茎白矣”。寥寥几句，可以敌得过几千字日常琐事的描述。这真是以少少许胜多多许了。

读这样的文章，一点也不会觉得它的内容空虚，相反的，倒真的感觉到它的内容非常充实，情感非常丰富。由此推论，其他各种文字难道不也可以写得更精煉、更生动一些吗？



雲山圖題詞。

陳繼儒（ちんけいじゆ 1558年生～1639年没）中国明代末期の書家・画家である。書画に造詣が深かったが自らは余技として墨竹・山水を得意とした。

燕山夜話 第1集10話 少少许胜多多许